

(株)静岡茶市場 一番茶総評

令和3年5月24日

一番茶取扱実績（5月21日現在）

【荒茶・本茶のみ】

	数 量 (kg)	平均単価 (円)	昨年年間比	
			数 量 (%)	平均単価 (%)
県 内	656,133.9	1,901	82	120
県 外	331,501.1	1,897	98	126
合 計	987,635.0	1,900	86	122

【荒茶・仕上・全茶種合算】

	数 量 (kg)	平均単価 (円)	昨年年間比	
			数 量 (%)	平均単価 (%)
県 内	757,452.6	1,723	78	121
県 外	442,588.9	1,581	82	132
合 計	1,200,041.5	1,670	79	125

本年度の県内産の一番茶は、2月3月の気温が高く、4月に入っても高い状態が続き、降水量も平年より多かったことから、昨年より5日程早く、過去にあまり例のない早さで生産が始まりました。生育は凍霜害もなく順調で短期集中型の生産が予想されましたが、頂芽優勢で側芽が少なく数量は膨らみませんでした。4月中旬には、やや冷え込んだ日が数日あり、芽伸びが抑えられました。

取引状況は、昨年からの新型コロナウイルス感染症の影響を引き続き受け、イベントの中止や縮小、外出の自粛、大規模店舗や小売店舗の時短営業や休業が続き、茶商は消費地からの予約注文が少なく、生産は早く始まるという先が見通せない中での仕入れとなりました。中には見込みで仕入れをするという茶商もありました。当初は慎重な姿勢での仕入れが続きましたが、4月中旬を過ぎた頃から、八十八夜商戦に向けた仕入れをする茶商が増え始め、比較的足早の取引が続きました。その後、年間販売用の仕入れに切り替わる頃になると早場所は終了し、中・遅場所は芽が薄く、芽伸びも悪いため数量が膨らまず引き合いが強くなり、価格は品落ち格下げや持ち合いで推移しました。東部地区の生産が本格化した4月末になると、ドリンク原料の需要はあまりなかったものの、巣籠り需要や下物の在庫不足、減産予測により下物が下げ止まりました。必要量や下物を確保しようと更に引き合いが強くなり、下物の価格はほぼ横ばいで推移しました。

弊社の取扱数量は、生育順調による短期集中型の生産を見越してのミル芽摘採、頂芽優勢による芽数の少なさ、中盤の芽伸びの悪さなどにより、昨年より減少した地域が多くなりました。地域、工場間の差はあるものの10～30%減と昨年に続いて減収となりそうです。数量が少ないことから価格は上がりましたが、なかなか価格が上向かないこと、高齢化や後継者がいないことによる放棄・放任茶園の増加、更には経営難から閉鎖する工場も出てくると思われれます。昨年のオリンピック・パラリンピックの延期によりドリンク原料需要が弱く、量より質の生産に切り替えた事、東部地区の契約化がより進んだことも取扱数量減少の一因となりました。

価格は、新型コロナウイルスの影響を昨年に続き受け、先行き不透明による不安を抱えながらの仕入れとなりましたが、繰り越し在庫の少なさや減産予想の為、必要量あるいは予定仕入れ量の確保により単価は、昨年より2割程高くなりました。本年の一番茶はピークらしいピークのない取引となりました。